理研会報

発行
印教研理科研究部
事務局
成田市立成田小学校
成田市幸町948－1

第40次 印教研 理科研究部集会 盛会に終わる

10・5 第40次 印教研理科研究部集会が成田小学校を会場として開催されました。会員数四百名をこす理科研究部。三分科会にわかれ各部会からの提案に基づき、熱心な研究討議でした。

小学校低学年分科会
助言者　福田　健

低学年分科会では、各部会が独自の研究主題を設けて、部会内学校から参集した研究員による共同研究の結果を、今回のテーマに取り組んで三年目の二部会、二年目の一部会、一年目の三部会と五部会から発表があった。各部会とも、低学年理科の大きな課題である現在の一、二年理科と生活科及び一、二年生活科と三年理科の関係について、真剣な検討の上に立った発表内容で、移行期における指導に苦労しながらも、着実な実践が続けられていることがうかがえる内容であった。各部会の発表内容は、概ね次のようなものであった。

一部会

意欲的に学ぶ子どもの育成
－発展・応用学習を重視して－

学習のまとめの段階になると簡単な発表や機械的な板書視写等の活動で終わってしまうことに疑問を投げかけ、特に低学年では、発展・応用的内容の活動を重視、工夫して扱うことにより、理科学習に対して意欲的な子どもの育成ができるとの提案がなされた。

協議等では、扱う内容や限界、時間の確保、準備に教師がどの程度日常的に対応できるか等の問題も浮き彫りにされた。しかし、生活科的な取り上げ方を考えるとき、学習活動の楽しさや豊かな経験を得させるためには、重要性の高まる内容・活動であり、より一層の研究の深まりが期待される。

二部会《県教研推薦》

地域の自然を取り入れ、楽しさを抱かせる理科学習の在り方は、いかにあるべきか。
－児童用ガイドブックを利用して－

前年度までに取り組んだ教師用ガイドブック作成に引き続いて、児童が使えるガイドブック作りと使用実践の結果を発表した。

野外に出て、どんな目的で、どこで、何を使って、どんな活動をさせるかを明確にしていくことは、理科、生活科を問わず必要である。本研究は、それに対応するものであり、使う教師の創意によって様々な使い方ができる余地も残されている。腰を落着けて取り組んだ研究である。

三部会

生き物の成長や変化に関心を抱かせる指導はどうあるべか。

低学年には、長期にわたる飼育栽培や野外での観察を内容とする活動が多い。児童が、興味や関心を抱き目的意識をもって対象に接すること無くして学習活動は成立しない。本研究は、飼育栽培方法のダイナミック化の工夫と明確な目的意識の持たせ方を切り口に進めようとするもので、幾つかの事例で会員からも賛同を呼んだ具体的な提案もあり、今後の研究の推進が期待される。

五部会

自ら求め追求する理科学習の工夫－児童自らが興味関心をもって活動できる理科学習の工夫－

栽培関係に内容を絞って、子どもたちの興味関心の実態について綿密な調査を実施した。そして、結果を研究計画や研究内容に反映させて研究を進めるべく、構想段階の内容を発表した。研究主題と仮説の関係がよく吟味されていて、今後の方向や内容が具体的に見通せる、期待できる研究である。

小学校高学年分科会
助言者　石井　望

教育研究集会も、本年度で四十回を迎えるという。研究の方法も一年目、主題の設定、二年目、実践研究、三年目、まとめ、というスタイルが各部会とも定着したようにみえる。ただ、ここで考えたいことは、大切な実践研究の時期が、短いということと、数回の実践の結果で、研究をまとめてしまうということである。年数をかけるということは、転勤等があって人が変わってしまうという難点があるが、一考したいものである。

さて、以下、各部会毎の提案について、感想をのべる。

第一提案「楽しさを抱かせる理科学習のあり方は、いかにあるべきか。」－天文観察ガイドブックを利用して－　（二部会）

教師が取り組みにくい天文教材に目をむけ、誰でもが利用できる手引書を作成し、それを利用しての実践発表であった。児童を取り巻く環境・学習時間の設定等大変難しい教材であるが、一つの手引書として有効に利用できるものと考える。難点をいうならば、やや、内容が豊富すぎて、読みづらい面があり、今少し、内容を精選したらよいのではないだろうか。（県教育研究会参加に推薦された。）

第二提案「人体の成長や働きについての認識を深める指導法はどうあるべきか。－三～六年（A・生物とその環境）主として人体の学習を通して」－　（三部会）

新指導要領で大きく内容の変わったものである。二年目の研究ということで内容的にも、だいぶまとまってきている。問題点として、保健指導になりやすいということが提案の中にもあったが、保健指導・体育の指導とも関連が深く、相互の関係について、深く検討し、研究を進めてほしい。問題意識を持たせるための効果的な映像の利用、個別化を図るための実験の工夫がなされていた。

第三提案「子どもが楽しみながら、見通しをもって学習に取り組むには、どうしたらよいか。」　（四部会）

研究仮説として、①身近な教材・教具の開発　②既習・生活経験の重視等、に視点をあて「水溶液の性質」を通しての研究であるが、具体的に、子どもたちはどんな経験をしているか。どんな見方や考え方が今できるのか、そして、ここでは、どういう経験をさせ考えさせて、どんな見方や考え方を育てるのかということについてもう少し深めてほしい。

第四提案「自ら求め、追及する理科学習の工夫　できる学習指導は、どうあるべきか。－継続観察の指導を中心として－（五部会）

継続観察をさせるなかで、興味・関心を持続させるかという研究であるが、一年目ということで、教師・児童のアンケート調査が主体となっていた。調査項目やその分析は非常に難しい面もあるが、興味・関心の持続の面からの視点からも考察してほしい。

第五提案「意欲的に学ぶ子どもの育成」－発展・応用をめざして－　（一部会）

学習への意欲を持たせ、生きて働く力を身につけさせるため、発展・応用に視点を当てた研究も大切なことではあるが、この場合、時間数の制約もあり、理科学習全体の計画を考える必要がある。

参加会員の声（低学年部会参加）
公津小学校　木村　豊

今年の低学年部会の提案は内容がこぐ、すぐにでも実践が可能で教育効果があげられるもの多かった。四つの提案のうち、A領域に関するものが三、B領域に関するものが一つで、A領域が多い。これは、理科の生活科への移行を見通してのもの、動植物の取り扱いに苦労している先生方にはとてもためになった。

一部会は、発展・応用学習の扱い方の実践報告があった。子どものノートから発想の広がりが感じられた。

二部会は「草花遊び」を使った授業実践報告があり、楽しみながら自然に親しむ児童の様子が報告された。

3部会は、動植物の飼育・栽培方法の工夫が報告され、目的意識をもって観察させるための指導計画が提案された。

5部会では、実態調査から植物の継続観察のさせ方の工夫を取り上げた。また「ヘチマの観察の視点」では、細かな観察の観点が示された。

各部会とも、来年度の提案がとても楽しみである。来年度も、実りあるものを楽しみにしている。

（紙面の関係上、一部内容を割愛させていただきました。）